

第 33 回 経済学検定試験

最多応募の明海大学 経済学部長 下田直樹先生に聞く！

2017 年 12 月 3 日（日）に実施された第 33 回 経済学検定試験で、大学の応募者数としては史上最多（ERE ミクロ・マクロ試験 237 名）となった明海大学 経済学部長 下田直樹先生に、「経済学検定試験」の活用状況についてお聞きしました。

——事務局　今回、御校の ERE ミクロ・マクロ試験の応募者数は 237 名となっていますが、これは第 20 回（2011 年 7 月 3 日実施）の専門学校（大学編入科）での 246 名を除き、大学の応募者数としては史上最多となりました。前回の第 32 回は 147 名、第 31 回は 166 名、第 30 回は 104 名、第 29 回は 96 名と、この 2 年間で倍増しています。その背景についてお聞かせください。

下田（敬称略）　経済学部経済学科は、グローバル経済コースとグローバル経営コースの 2 つに分かれているのですが、グローバル経済コースでは、3 年次への進級には、ERE ミクロ・マクロ試験で「B」ランク以上の取得が要件として設けられています。もちろん、本試験後の「模試」や「追試」、授業・講座等への出欠状況などの総合的な評価で判断しますが、「B」ランク以上を取得すれば、（他の必修科目の単位取得状況にもよりますが）ほぼ自動的に進級できる仕組みとなっています。この制度を導入して、丁度、丸 2 年が経過しました。1 年生は 12 月の試験が第 1 回目の受験となり、2 年生は 7 月と 12 月の 2 回とも受験します。つまり、ほぼ全員が計 3 回は受験することになります。経済学を学ぶ 1、2 年生にとって、「B」ランク到達は 1 つの目標となっているのです。

——事務局　受験者のランクを調べさせていただきましたが、「B」ランク取得者が制度導入時から年々増加し、今回は 2 年前の倍近くになっていますね。

下田　まだ 2 倍まで増えてはいませんが、「B」ランク一歩手前の受験者も含め、学生はよく頑張っていると思います。新 3 年生は、よく勉強します。

——事務局　受験にあたり何か取組みはなさっているのでしょうか。

下田　大学の e ラーニングシステムや授業はもちろんのこと、ERE ミクロ・マクロ試験のための有料の直前講座を設けています。この講座は経済学部の（専任及び非常勤）教員が講師役となって、授業後の 16 時 20 分から 19 時 30 分まで行われます。経済学部の教員の全体制による、授業と連携した組織的な取組みといえると思います。

——事務局 直前講座は有料とのことですが、受験料は学部負担でしょうか。

下田 いいえ。個人負担です。学部負担にすると欠席率が高くなる傾向にあります。受験料はあくまで個人負担とし、「B」ランクに達すれば、講座料金は受験者に返還される仕組みになっています。

——事務局 この制度を導入するにあたり、ご苦労があったかと思いますが、いかがでしょうか。

下田 ERE ミクロ・マクロ試験は、以前から受験していましたからある程度の下地が来ていたと思います。あとは先生方といかに連携し、体制を整えるかということでした。

——事務局 ERE ミクロ・マクロ試験を経済学部で採用後、学習の成果として、1、2年生の「B」ランク取得者が相当数増加した、つまり、目に見える部分の成果をお聞きしましたが、他の部分ではいかがでしょうか。

下田 文科系の学生は、経済学部や法学部に、目的や目標を持たずになんとなく入学する傾向が強いことは否定できません。しかし、本校の場合、グローバル経済コースの1、2年次に「B」ランク取得という目標を持たせました。最初は経済学の理論が理解できなくても、学習により知識が身につけて、徐々に理解できるようになってきました。そして、ERE ミクロ・マクロの問題が解けるようになり、問題が解けると、次に自信へとつながってきています。「やればできる」と思うようになってきています。

——事務局 経済学の学習を通じて、学生のモチベーションの向上につながっているということでしょうか。先ほど、「この制度を導入して、丁度、丸2年が経過した」とお聞きしましたが、当時の2年生は来春卒業だと思います。この試験は、就職活動にはどのように役立つでしょうか。

下田 先ほどの繰り返しになりますが、学生が自信をもって就職活動に望むようになると思います。3年生の就職ガイダンスへの出席率も、100%に近づいています。また、学習の成果をはかるために ERE ミクロ・マクロ試験のほかに MOS 試験などの外部試験も活用していますし、企業側でも要望があります。面接に際しては、エントリーシートに記入した ERE ミクロ・マクロ試験の評価が質問事項にあがることもあります。ERE ミクロ・マクロ試験を学生の目標達成・学修成果の可視化のための1つの手段として利用しています。

——事務局 長時間にわたり、ありがとうございました。